

(第三種郵便物認可)



セグド大医学部で解剖学の授業を受ける各国からの学生たち
＝ハンガリー(いずれも共同)



ハンガリー共和国 欧州のほぼ中央に位置する共和制国家。人口は約1000万人で、国土は日本の約4分の1。首都はブダペスト。伝統的に理数系の教育に強く、医学教育もレベルが高い。ノーベル賞受賞者の人口に占める割合は世界一。

日本人の学生が集まるセンメルウィス大学の自習室で後輩を指導する沼田るり子さん



目の前で祖母の命が燃え尽きようとしていた。心拍数を示すモニターの数値が徐々に下がっていく。「もう逝くんだな。最後に大きく息を吐き出した祖母は、そのまま安らかに眠った。九十二歳だった。最期の瞬間を目に焼き付けた。

ブダペストにあるセンメルウィス大学医学部二年の沼田るり子さん(二〇)茨城県出身。母は、農業を営む母方の祖父と同居しながら育った。母は実家に縛り付けられる生活が嫌で、祖母とほいつしか疎遠になっていた。

死の前日、祖母の枕元で母が予想もしなかった言葉を口にした。「お母さん、愛しているよ」。二人は気持ちを通じ合っていないとばかり思っていた。祖母の目から涙がこぼれ落ちるのを見て、人間という存在がたまたまなくとおしく思えた。

当時、筑波大の四年生。対人関係がうまくいかず、家に引きこもっていた時期だった。そんな自分に祖母は最後まで

センメルウィス大2年 祖母の死を機に挑戦 沼田るり子さん(茨城)

まで生き抜く姿を見せてくれた。「るりちゃんが大学に行くためだから」。市場に作物を売りに行き、こつこつお金をためてくれた祖母。医師になることをずっと楽しみにしてくれていた。大学進学時に一度はあきらめた道に、再び挑戦してみようと思いついた。

偶然目にした新聞記事で、ハンガリーの医学部が日本人の学生を募集していることを知った。学費も日本の国立大程度なのが魅力だった。米國がリードする現代医学の世界。英語で学ぶことの利点は大きいと思った。

世界各国から学生が集う英語コースは、ストリートで卒業できるのが半数程度。ここには何となく医学部に来てしまったという人はいない。

大学の授業が終わると、日本人の学生が集まるブダペストのスタディールーム(自習室)で後輩たちの指導もこなす。引っ込み思案だった自分は、もうどこかへ行ってしまった。

海渡り 医の道志す

ハンガリー国立大で学ぶ日本の若者

ハンガリーの3つの国立大医学部は、世界約20カ国から学生を受け入れている。授業はすべて英語。3年前から日本人にも門戸が開かれ、現在、約80人が学ぶ。特徴は日本の国立大と比べてもそれほど高くない学費と「医師になりたい」という熱意重視の入学選抜。閉塞(へいそく)感漂う日本の医療界を尻目に、一度は医の道をあきらめかけた若者たちが海を渡り、世界各国の学生と切磋琢磨(せつさたくま)している。



セグド大で授業を受ける佐藤英之さん

薬剤師をしながら、趣味を楽しみ生き方をしようと思っていた。だが医療現場を間近で見ると、さきまにさまざまな疑問を感じ、「どうしても医師の道に」と思うようになった。

ハンガリー南部にあるセグド大学の医学部二年生の佐藤英之さん(三〇)埼玉県出身。母は、四年間の薬剤師経験を経て、医学生になった。

社会人として初の勤務は鹿児島県の田舎町。小児科クリニックの脇にある調剤薬局で、患者の多くは赤ちゃんだった。

「夕方からずっと熱が高い。このまま朝まで様子を見て大丈夫か」。心配する母親から、夜中に相談の電話がたびたびかかってきた。自分の一存では判断できないものどかしさ。時間外で気が引けたが、医師に連絡を取らざるを得なかった。

宮城県の病院でも働いた。多くの尊敬できる医師がいたが、患者の話をきちんと聞けないような人にも出会った。もともと医師になる気はなかった。

セグド大2年 佐藤英之さん(埼玉) 薬剤師の経験生かす

周囲は年下の学生ばかり。でも自分のような回り道をした人間の方が、よりよい医師になれるという自信がある。

各国の学生が集う英語コース約百五十人の中で、成績はトップクラス。薬剤師で得た知識と経験が生きているという。

やって来るまではまったく知らない国だったハンガリー。時間はゆったりと流れるが、夜中の一時ごろまで勉強し、朝七時に起きる生活が続く。

日本で見えてきたのは医師不足の町。将来はプライマリケア(初期診療)に取り組むのが夢だ。

日本人医学生の海外留学はハンガリーだけでなく、チェコやポーランドなど東欧諸国を中心に近年広がりを見せている。医学の世界でも汎用性の高い英語で授業を行う大学が多いため。

ハンガリーでは約二十年前からセンメルウィス大と、南部にあるセグド大、ペーチ大の国立三大学が英語コースを設置。医学部は六年制で、事前に一年間の予備コースで英語のほか、生物など理系科目を学んでから進むこともできる。

学費は年間百数十万円で日本の国立大医学部より多分の一に上るといふ。

少割高だが生活費は格安。入学に際し、医師という職業への熱意が重視される。日本ほど入試難易度は高くないが、入学後の進級は簡単ではない。

ハンガリーでは自国民は授業料が無料、各大学と個別に審査し、受験資格を判断する。

早ければ二〇一二年にも日本人の卒業生が出る予定だが、入学の受け付けや医学生を支援している民間事業者「ハンガリー医科大学事務局」(東京都新宿区)は「ハンガリーの医学部を卒業するのは日本よりも難しい。中途半端な心構えでは授業についていけない」と話している。

医学部留学 東欧が人気 汎用性高い英語で授業